

KYOKY 123

特集 4年間にわたる現代GPの活動を終えるにあたって
特集 京都教育大学 特別支援教育GP



京都教育大学

<表紙>

『光と陰とやまなしと…。』

附属桃山小学校 6年 藤田 恭未

光が当たっている裏には陰がぜったいにかくれています。
光の向きで陰の向きも変わります。なので陰の向きをがんばって
描きました。水の色もいろいろな色をまぜて表現しました。
かにの色にも注目して見て下さい。一匹ずつ色がちがいます。



CONTENTS



<表紙> 附属桃山小学校 6年 藤田 恭未

特集

- 2 **〈ものを作る〉って楽しいね！
真似では、楽しさが味わえないね！
—4年間にわたる現代GPの活動を終えるにあたって—**
教育学科准教授
岡部 美香
- 6 **京都教育大学 特別支援教育GP
「KYOの特別支援教育トライアングルプラン」**
体育学科教授
井上 文夫

海外見聞録

- 7 **タイ国への海外研修に参加して
2008. 8.17～24**
大学院連合教職実践研究科
学校経営力高度化コース
福田 紀子

留学生の声

- 9 **新しい世界への外出**
平成20年度 教員研修留学生
趙 賢深
ジョ ヒョンシン (韓国出身)

研究余滴

- 10 **「複雑系の思考法」との共生**
数学科教授
占部 博信

京教学内探訪

- 12 **京都中学校の新しくなった教室を紹介します**
附属京都中学校副校長
橋本 雅子

附属学校園だより

- 14 **こどもとおとなの協同活動～園内清掃～**
附属幼稚園副園長
鍋島 恵美
- 15 **附属桃山小学校の創造性教育**
附属桃山小学校副校長
藤田 加代
- 17 **中学生は名保育士さん
—幼稚園との交流授業—**
附属桃山中学校副校長
高木 英男

卒業生の声

- 18 **「一期一会」を大切に**
長岡京市長岡第五小学校教諭
佐伯 知英
- 18 **「よき出逢いを」**
京都市立二条中学校教諭
桂 悠紀子
- 19 **「井の中の蛙大海を知らず、
されど空の高さは知りうる…」**
愛知県立海翔高等学校教諭
木本 昌光

ようこそ大先輩

- 20 **動詞人間学**
京都光華女子大学教授・京都教育大学名誉教授
糸井 通浩

TOPICS

- 21 **地域貢献・地域支援のための
データベース検索方法**

読者の皆さまへ・編集後記

- 23 **地域連携・広報委員会委員長
武蔵野 實**



〈ものを作る〉って楽しいね！真似では、楽しさが味わえないね！ —4年間にわたる現代GPの活動を終えるにあたって—

教育学科准教授 岡部 美香

はじめに

本学が行っている事業の1つ、現代GP「知的財産創造・活用力を育成する教員の養成」の活動が、この3月で終了します。ここでは、4年間にわたるこの事業の活動内容と成果をご報告したいと思います。

現代GPとは？

現代GPは、正式名称を「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」といいます。GPとは、Good Practiceの省略形で、よい実践、という意味です。「現代」とついているのは、現代において社会的な要請の強い政策課題に対応したテーマを文部科学省が設定しているからで、現代GPは、そうした現代的なテーマに関する、各大学等から応募されたプログラムのなかから優れたものを選定し、財政支援を行うプロジェクトです。

「知的財産」は、平成15年に内閣府に知的財産戦略本部が設置されて以来、注目されている領域で、現代GPの1部門として設置されています。本学は、この知的財産部門に応募し、平成17年に選定され、4年間、事業に取り組んできました。今年度がその最終年度でした。

事業の目的は、豊かな知的財産を有する京都の地域性を活かしながら、知的財産創造・活用力を育成するのに必要な資質能力をもつ教員を養成し、初等教育段階での知的財産教育の活性化をめざす、ということにありました。

知的財産とは？

知的財産とは、人間の知恵や工夫から生み出された創造物のことをさします。例えば、科学技術の発見や発明、著作物・出版物、伝統工芸・芸術、歴史的文化財、世界遺産などが、これにあたります。また、映画やゲームソフトなどのコンテンツ、Disneyの製作している映画などの著作権も知的財産です。さらに、地域ブランド製品（地域の名前が入った生産物・製品）も、やはり知的財産です。

これらの知的財産は、経済活動と密接に関わるものです。宇治茶を例に挙げると、ある一定価格で出回っているお茶が、「宇治茶」という名前がつくと、その

価格が少し上がります。それゆえ、許可なく名前が乱用されることによって利益が不当に害されたり生産物や製品の質が変容したりしないよう、これまでは「保護」することが知的財産に関しては重視されてきました。また、保護するための専門知識をもった職業人を養成するというのが、知的財産教育の中心になってきました。つまり、これまでは、専門家の職業教育を行う高等教育において知的財産教育がさかんに行われてきたのです。

しかしながら、知的財産は、ガラスケースのなかに収められたまま、使われないままですと、まったく意味を成しません。人々の共有財産、あるいは、人類の共有財産になってこそ意味がありますし、また、経済効果もさらに上るといわれています。ですので、近年は「保護」だけではなく、知的財産の「創造」・「活用」が大事なのではないかと考えられるようになってきました。

特に「活用」に関しては、専門家だけではなく、一般の人々がルールを守って活用することによってこそ、知的財産は大きな意味をもちますし、経済効果も上っていきます。したがって、知的財産の活用をめぐることは、一般道徳、一般教養として知的財産に関する意識を育んでいかなければならないということが課題となってきています。

本学のGPは、まさにここに着目しました。本学は、これまで高等教育を中心に行われてきた知的財産教育を初等教育の段階から行えないか、行うとしたらどのような内容と方法で行えばよいのか、について研究することを試みたのです。

事業の内容

本学GPの事業の目標は、まず1つには、**小学校における知的財産教育の教材および授業の開発**、もう1つには、**それらを活用した教員養成プログラムの構築**、でした。1つめの目標は研究部会、2つめの目標はカリキュラム部会が中心となり、活動してきました。

研究部会には、京都府・京都市それぞれ2校ずつの研究協力校の教職員の方々・子どもたちにも加わっていただきました。**民話、先端技術、京野菜、デザイン**

という4つの知的財産それぞれに即した教育実践に長年熱心に取り組んでこられた学校が、研究協力校としてご協力下さいました。民話部会にご協力いただいた**伊根小学校**は、民話が非常に豊富な京都府北部地域に位置しています。先端技術部会にご協力いただいた**梅美台小学校**は、学研都市がすぐ近くにあり、GPの事業を学研都市の科学博物館の方が見に来られたこともありました。また、京野菜部会では、まさにすぐきなどの京野菜を育てている畑に囲まれた**大宮小学校**の先生方に研究協力をいただきました。そして、デザイン部会にご協力いただいた**六原小学校**は、清水焼などの伝統工芸の工場や販売所が校区に立ち並び、長年にわたって図画工作の研究を重ね、実績を上げてこられた学校です。

4校の研究協力校の教職員の方々・子どもたち、そして京都府教育委員会、京都市教育委員会のご協力のもと、GPの事業は、次のような活動を展開いたしました。

17年度の活動

まず、初年度（17年度）は、研究協力校の校区における知的財産、および、それを教材化する過程やそれを主題とした授業実践の実態について調査分析をさせていただきました。これは私たちにとっては、非常に重要な意味をもつ活動でした。いきなり外からやってきて、とってつけたような内容を注入するというやり方ではなく、研究協力校がそれまでずっと受け継ぎ発展させてきたカリキュラムや授業内容にできるだけ添いながら、知的財産教育という新たな実践を展開できるよう、調査と話し合いを何度も慎重に重ねました。



18年度の活動

18年度に入ってから、4つの研究協力校で、**知的財産教育の試案教材や試案授業の開発**に取り組みました。また、知的財産に関する本学の学生の理解を深

め、意識を高めるために、知的財産に関連する授業を開講しました。**基礎セミナー、知的財産法概論**などいくつかの授業がこの年に始まっています。**知的財産教育に関するセミナー**も開催しました。さらに、本学図書館のなかに**知的財産コーナー**を開設し、学生が知的財産および知的財産教育について自習できる環境を整えました。



19年度の活動

19年度は、まず、18年度から開発してきた**試案教材・試案授業をさらに改良し、発展させる**という試みに力を入れました。その結果、知的財産に関するさまざまな教材が生まれ、本学の学生が各研究協力校でその教材を用いた授業を実践させていただくことができました。そのうちのいくつかを紹介します。

民話部会では、子どもたちが地域の民話をもとに紙芝居を作成し、それを友だちに見せながら実演的に語るという授業を実践しました。これによって、10を超える伊根地方の民話が紙芝居と語りというセットの形で知的財産化され、受け継がれることとなりました。

先端技術部会では、「ものの性質」の学習を通して、知的財産の「創造」と「保護」の意識を子どもたちに育むための授業を実践しました。まず、子どもたちは「ものの性質」に関する一定の知識を獲得し、それを活用して便利な道具のデザインを創造しました。次



に、そのデザインが他の人に無断で利用されるという事態について、子どもたちにいろいろ感じたり考えたりしてもらいました。

京野菜部会では、実際に京野菜（万願寺とうがらし）を子どもたちが育て、収穫し、それを家族の人たちと調理して食べるだけでなく、さらに、子どもたちが万願寺とうがらしの絵を描き、その絵に詩をつけ、さらにその絵と詩をアイロンプリントしてオリジナルTシャツを作成する、という一連の授業が行われました。京野菜について詳しく学習した子どもたちには、一人ひとりに本学から「京野菜ジュニア博士認定証」が送られました。



デザイン部会では、子どもたちがオリジナルデザインの清水焼茶碗を作成しました。子どもたちは、学校のなかの好きなおとこ、好きな物を絵に描き、それを自分なりにデザイン化し、世界でたった一つしかない清水焼茶碗を生み出したのです。また、茶碗に合わせて若狭塗りの箸も作成し、子どもたちは、自分の作った茶碗と箸にふさわしい食卓をイメージして工作で作り上げました。

こうした授業や教材以外にも注目していただきたいのが、新たに開講された知的財産教育関連授業です。19年度から、本学のカリキュラムには**知的財産教育論**という授業がさらに1つ加わりました。これは、**本学オリジナルの知的財産教育関連の授業**です。これ



は、知的財産の専門家（弁理士）を講師としてお招きし、本学の教員とともに、知的財産に関する基礎的な理論や知識を教えていただいた後、上に述べたような研究部会で開発した教材や授業を学生に紹介・教授する、という授業です。また、ほかの教職関係の授業でも、このGPで開発された教材が活用されました。

そして、もう一つ、**知的財産、特に著作権に関するHP**も、19年度から立ち上げました。ここには、学生生活や教員生活のなかで必要とされる著作権に関する知識やその解説が掲載されています（「学生と教師のための著作権基礎知識 - 学生生活や教育場面に対応して -」<http://www.kyokyo-u.ac.jp/KOUHOU/gpcz/cyosakuken/index.htm> 2009年3月3日現在）。

20年度の活動

最終年度である20年度には、成果発表の場として、平成20年11月15日（土）、本学F棟大講義室において**知的財産教育シンポジウム**を開催しました。シンポジウムのタイトルは、「小学校における知的財産教育を充実させるために」です。

このシンポジウムでは、まず第1部では、基調報告として「知的財産創造・活用力を育成する教員の養成」というこのGPの概要が説明され、続いて、それぞれの研究部会で調査研究・研究開発・授業実践に参加していた学生や大学院生たちによる「活動報告」が行われました。民話部会は、石原昴朋氏、巻木佳菜子氏、和田雄弘氏。先端技術部会は、三木学氏、鈴木雄大氏、寺野綾氏、村木庸平氏（当日の発表は、都合により本学准教授の谷口和成先生）。京野菜部会は、中島信氏。デザイン部会は、鈴木光子氏。GPの活動に参加した学生たちの代表として登壇した彼らは、活動の様子を生き生きと伝え、知的財産教育の意味を力強く訴えていました。



第2部では、知的財産教育論の授業でもお世話になっている弁理士の大西正夫先生、本学の植山俊宏教

授、そして私の3人が登壇し、「小学校における知的財産教育を充実させるために」と題したディスカッションを行いました。GPの成果としてここで提示されましたのは、**小学生にとっての知的財産マインド**とは何かということと、**小学校における知的財産教育におけるポイント**はどこかということです。

まず、**小学生にとっての知的財産マインド**とは何かということについてですが、これは、**〈ものを作る〉ことの楽しさ・面白さと勝手に人が作ったものを真似することへの違和感**であろう、という結論に私たちは達しました。そこで、研究協力校で実践させていただいた授業のなかでは、子どもたち自身にもものづくりを体験してもらうことを活動の中心に置きました。

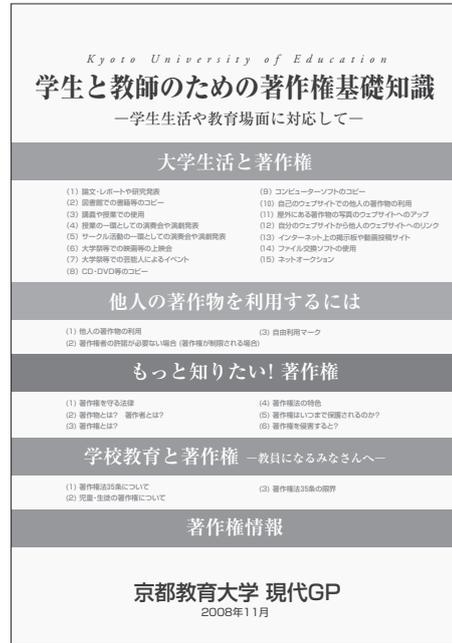
ところが、ここで私たちは、小学校教育ならではの課題に直面しました。小学校の授業で子どもが何かを作るとき、学校の教員はしばしば、「上手な人の作品や方法のいいところを真似て、工夫してみなさい」という指導をします。ここでいう真似と、上で述べたような違和感を催すような、あるいは社会では経済上の不利益を他人に与えてしまうような真似とは、どこが違うのでしょうか。この違いを小学生に説明するのは、極めて難しいことです。

そこで、パネリストの大西先生からご提案いただいたのは、次のことでした。知的財産教育、特に小学校における知的財産教育においては、「〈ものを作る〉って楽しいね！でも、すっかり真似をしてしまうと、その楽しさが味わえないから嫌だよね！」という子どもたちの感覚をベースに置いたらいいのではないかと、いうことです。この原稿のタイトル「〈ものを作る〉って楽しいね！ 真似では、楽しさが味わえないね！」は、まさに私たちが最後に辿り着いた、小学校における知的財産教育のめざすべき理念なのです。



このシンポジウムの内容を中心に、現在、最終報告書を作成しています（平成21年3月末発行予定）。また、機会がございましたら、ぜひご一読いただければ幸いです。

さらに、上に述べましたHP「学生と教師のための著作権基礎知識 ―学生生活や教育場面に对应して―」をもとに、パンフレット『学生と教師のための著作権基礎知識 ―学生生活や教育場面に对应して―』を作成しました。本学の学生・大学院生・教職員以外にも近隣の小学校等に配布する予定です。



おわりに

最後に、このGPの活動の成果をもう1つ報告し、稿を閉じたいと思います。小学生が知的財産と向き合うとき、彼らには「利益」、「経済効果」などという、いわゆる大人の事情はほとんど関係ありません。知的財産を創造することがどんなに楽しいことなのか、創造した知的財産をどんなに周囲の人は喜んでくれるのか、知的財産を生み出すために職人や専門家といった人々は何のような努力をしているのか。子どもたちが注目するのは、人間が生きることにとって意味をもつ知的財産です。これを、弁理士の大西先生は、「パブリック・ドメインとしての知的財産」とっておられました。これは、**人々の（人間の）共有財産としての知的財産**という意味です。知的財産といえば、大人はすぐ経済的なことがらを考えてしまいますが、知的財産とはそもそも人間が生活改善・向上のために作り出したみんなでも共有すべき財産のことを意味するのです。このことを、あらためて小学生から学ぶことができた…これが、GPにおけるもう1つの、教員志望の学生と彼らを教育する本学の教職員にとっての大切な成果となりました。

京都教育大学 特別支援教育GP 「KYOの特別支援教育トライアングルプラン」

体育学科教授 井上文夫

このGPは昨年度に採択され、今年度が最終年度になります。このGPの目的は、京都教育大学特別支援教育臨床実践センター、京都府・京都市教育委員会、学校の3者が協働して、特別支援学校の若手リーダーや特別支援教育のスペシャリストを養成し、地域全体の特別支援教育の内容を充実させることです。センターは現在、藤岡センター長のもとに相澤准教授が地域連携の中核となるべく着々と整備を進めています。若手リーダー養成プログラムは、本学学生が公立学校でのアクション・ラーニングを通して、臨床心理学・医学・教育学の視点から特別支援教育の核となる3つの技能を獲得するプログラムですが、今年度から発達障害学科の佐藤准教授を中心とした指導のもとに京都市および京都府のいくつかの公立小学校でのプログラムが開始しており、その成果の一部はシンポジウムでも発表されました。また、若手リーダー養成プログラムの一環として、附属教育実践総合センター主催の「特別支援教育のブリーフセラピー」と、美術科と特別支援学校の連携による「陶芸ワークショップ」の2つが開かれました。スペシャリストの養成は特別支援教育コーディネーターとしての専門性を高めようというのですが、大学院での発達障害児教育専修による「特別支援教育実践演習」「特別支援教育事例研究」の授業では特別支援教育士の資格に直結するプログラムを提供し、これまで多くの現職教員が登録受講し、好評を博しました。スペシャリスト養成のもう一つの柱となる臨床心理士や学校心理士などの更新ポイントとなる研修については、今年度は9月に宇都宮大学の梅永教授による「発達障害児の就労を考える」、12月に東京学芸大学教授の「LD児の読み・書き指導」が開催され、多くの参加者がありました。さらに、この2月には東北大学の本郷教授による「気になる子どものアセスメントとその支援」が開催されました。

これまでの活動のまとめとして11月29日に京都教育大学 特別支援教育GPシンポジウム「今後の特別支援教育推進における大学の役割」が開催されました。午前の第一部では、筑波大学の石隈利紀教授より、「チーム援助に基づく特別支援教育」と題してご講演いただき、子どもの苦戦を援助するには教師が一人で抱え込むのではなく、学外を含めた多くの人々が

チームとして援助できる枠組みを作ることの重要性を述べられ、多くの参加者が熱心に聞き入っていました。午後の第二部の「KYOの特別支援教育トライアングルプランの成果と課題」と題したシンポジウムでは、佐藤准教授のコーディネートにより、若手養成プログラムに参加した学生と受け入れ側の学校、スペシャリスト養成プログラムに参加した現職教員からそれぞれ貴重なご意見をいただき、活発な討議が行われました。最後に、文部科学省特別支援教育課の新谷氏より、本シンポジウムのコメントと今後の特別支援教育推進において、本学が果たすべき役割と期待について話され閉幕となりました。

特別支援教育が全ての学校の現代的教育課題であることから、本プログラムの集大成として、「特別支援教育ハンドブック」を教育委員会の協力のもとに作成し、京都府内全ての公立学校教員に配布する予定です。

本GPは、今後展開される、学校での特別支援教育への取りかかりとなる種をまいたようなものです。今後、まかれた種がそれぞれの学校や地域でどのように成長して、どのような実を結ぶかを楽しみにして見守りたいと思います。最後に、本GPの実施にご協力いただいた多くの先生方に感謝いたしますとともに、京都での特別支援教育が多くのの人々の連携のもとに発展し、苦戦する子どもたちの幸せへとつながることを祈念いたします。



<写真1>シンポジウム



<写真2>講演のようす

タイ国への海外研修に参加して 2008. 8.17 ~ 24

大学院連合教職実践研究科 学校経営力高度化コース 福田 紀子

今回15名の現職教員大学院生が参加し、研修の中心はタイ国の教育機関を訪問し参観すること、そして小・中学校では主に日本の文化を紹介するデモンストラーションを行い、授業参加することでした。

10年前に観光で訪れたことのあるバンコクは、交通のインフラ整備が進み、急速な発展を遂げていました。同時にタイの教育が著しい発展を遂げていることは、国の教育施策や教育関係者の思い、そして子どもたちの姿から強く感じ取りました。

1. 輝く瞳に感激！

学校訪問初日は、スアンスナンタ地域総合大学付属小学校と中学校での参観と授業でした。授業はこの日を迎えるまでの準備段階で、日本の文化に子どもたちは興味を持ってくれるか、小学生には難しくないか、中学生には簡単すぎるのではないか、という心配も取り越し苦労だったようです。「あやとり」「おり紙」「独楽」「けん玉」等、子ども達は目を輝かせて楽しく活動している姿にホッと胸をなでおろしながら一緒に活動を楽しみました。活動を通して見られた純粹で生き生きと輝く瞳、素直な子ども達の姿に感激し温かな気持ちになりました。この感激は参観だけでは得られなかったでしょう。日本の子ども達が失いつつある姿をタイの子ども達に見ました。

その後の学校訪問はバンコクを少し離れ、アユタヤ地域総合大学付属学校や農村地域の小・中学校等を訪れました。タイはバンコクと地方との経済・教育格差は大きく、また国内教育格差の解消が大きな課題として存在している国ではありますが、訪問学校での子ども達の生き生きと輝く瞳からは、学習への意欲・やる気が伝わってきました。そして近い将来においてタイ

が日本に追いつく日が来るとおもいました。

2. タイの英語教育

英語教育ではタイが日本の先を走っていました。今回のタイ研修で一番考えさせられたのは英語教育についてです。訪問小学校では1年生から英語学習あり、さらに5・6年生では話すだけでなくテキストを使用して書く学習をしていました。日本の外国語活動との違いに驚きました。そして訪問中学校生徒の英語力の高さにも驚き、小学校からの英語教育体制が効果を上げているのだろうと推測しました。タイの都市部小学校では英語教育に多くの時間を割いているようです。そのことで課題も挙がってくると思われますが、大きく一歩を踏み出して取り組んでいるタイの英語教育に刺激を受けました。

そしてタイ研修から帰国後、アジア諸国をはじめ世界の英語教育事情を調べてみました。そしてタイをはじめ、中国・韓国・台湾などの小学校英語教育のシステム作りが進んでいることを知りました。英語時間数を比べても、日本は他のアジア諸国に水をあけられて



アユタヤ地域総合大学付属小・中学校



「英語学習」 スアンスナンタ地域総合大学付属小学校

います。アジア諸国の急速な英語教育熱に伴って問題や課題も出ているようですが、グローバル化が進む社会、人材育成面での国際競争も加速し、国家戦略として小学校段階で英語教育を実施しているアジア諸国の姿が見えてきました。これらの国に比べると遅れをとっているのが日本の英語教育です。

グローバル化が急速に進んでいる今を生きる子ども達にとってコミュニケーションツールとして英語の必要性が増していることは確かです。英語が世界の共通言語となっている現実があります。日本の小学校英語が、中・高での英語コミュニケーション能力の素地となるために、積極的、前向きに取り組む必要があると今回のタイ研修を終えて考えるようになりました。そして小学校における外国語活動の英語を考えると同時に、小・中・高の一貫した英語教育、そして指導体制・内容・教材などを含め、一貫したプログラムやシステム作りが効果を上げていくために重要ではないでしょうか。

また外国語を学ぶことは、外国の文化を知ることでもあります。外国語活動は多様な文化、価値観、生き方に触れられる機会でもあり、活動を通して子どもたちの視野が広がるような学びにしたいと私は思っています。



「エメラルド寺院」

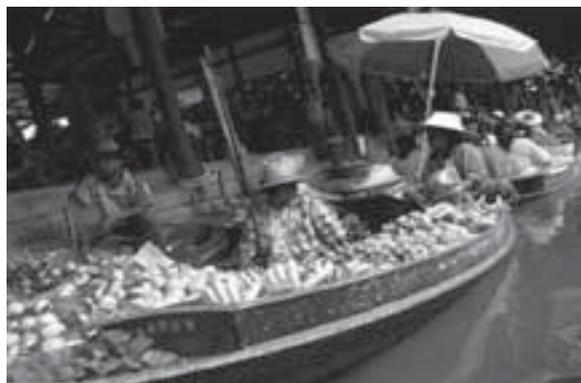
3. 旅の楽しみ “あれこれ”

今回のタイ研修参加を迷っていましたが、思い切って参加して本当によかったです。久しぶりの7日間の長旅は充実していました。これも堀内先生のいたるところでの計らいがあったからです。研修ではありますが、美味しい食事やお楽しみの多い日程など細部まで気遣っていただきました。設定されたレストランでのタイ料理はどれもおいしかったです。10年前のタイ旅行で食べた“トム・ヤム・クン”は風味や辛さが強く苦手でしたが、今回大好きになりました。それに南国フルーツも思う存分味わいました。水上マーケットで買ったマンゴスチンとランブータンの味と値段に満足しました。バンコクの夜遊び?も楽しみました。チャオプラヤ川のナイトクルーズでは、ライトアップされた仏塔のシルエットは素晴らしい景観でした。そして帰国前日は夜が更けるまで女7人が夜景を肴にワイワイガヤガヤと心置きなくバンコクを満喫しました。

最後になりましたが、貴重な経験をする機会を与えてくださった堀内先生、そしてタイで私たちを快く迎えてくださった各種教育機関の諸先生方や日本の公的機関の方々に感謝しております。本当にお世話になりました。



「甘い・辛い・酸っぱい トムヤムクン」



「安くて美味しいフルーツ」 水上マーケット

新しい世界への外出

平成20年度 教員研修留学生 趙 賢 深
ジョ ヒョンシン(韓国出身)

2007年10月、日本に来る前、私は10年ぐらいの教師生活に疲れていた。そして、マンネリズムに陥って教師としての使命感、目的意識などを忘れていた。その時の私には本当に脱出口が必要だった。もしかしたら物理的距離は近いけど精神的距離は遠い隣

国の日本への外出は再充電を口実にした逃避だったのかも知れない。しかし、過ぎた時間を振り返れば、日本での1年余の生活は私の人生の中で何とも変えることができない幸せな日々だった。

日本に来てから新しい経験をいっぱいしたけど、教師だからこそこの場を借りて、‘日本の教育’に関して感じたことを話したいと思っている。

韓国は植民地の時代から現在に至るまで日本教育の影響を沢山受けてきたから、現在の日本教育を見れば未来の韓国教育も見えないかという漠然たる期待感があった。それとともに日本の優れている教育力量を学んで私の教師としての力量を少しでも成長させたいという気持ちも大きかった。幸いにも教育大学へ来て多くの教授の下で授業を受けたり、多くの現職先生たちに出会って話し合ったり、また実際授業の見学をしたりしながら日本教育の状況を直接的に経験することができた。

こういう経験を通して日本教育の最大の長所だと思ったことは、教育らしい教育をしているということだ。

韓国は学歴至上主義社会で、学校ではひたすら試験だけのために教えていると言っても過言ではない。にもかかわらず学校教育が大学受験と関係ない部分が多くて、別に大学受験勉強をしなけばならない場合が多い。それで私教育、すなわち学院教育(日本で言う塾)が盛んな状態にある。

それに比べて日本は小学校から高校まで学習内容の連携がよく出来ていて、教えなければならない部分は基礎的なところから徹底的に教えているという感じがした。韓国の学校状況とは違い、基礎学力の涵養にもっと気をかけているということだろう。

そして、日本の学校で教科学習だけではなくて部活を通してそれぞれの趣味活動を奨励していることも羨ましかった。‘教科成績’にすべてをかけて、24時間勉強にだけエネルギーを消耗している韓国の生徒達が可哀そうな気持ちになった。

一方、教育に対する行政的な投資の不足、ゆとり教

育の失敗、教育当事者たちの意思疎通の不在、官僚的
学校運営など、現在日本教育が持っているさまざまな
問題点も分かるようになった。その中でも教師の立場
で一番驚いたことは‘モンスターペアレンツ問題’
だった。親たちが学校に対する信頼と教師に対する尊
敬心を失ったからには、学生たちもそうなるのは決
まっていることだと思う。京都のある高校に授業見学
に行った時、学生たちが先生に自然にため口で話すこ
とを見てびっくりした事がある。それで一緒に見学し
ていた日本の先生にそういう学生を指導しないかと聞
くと、日本の学校では学生たちを叱りつければ、それ
がむしろ問題化されることが多いから、先生たちがそ
の指導部分から手を放しているとおっしゃった。教師
に‘教えること’の甲斐を奪い、ただ職業に過ぎない
という無力感を感じさせた社会的雰囲気最大の問題
ではないかという気がした。教師が自分の仕事に対し
てプライド、使命感、やりがいを失った以上は、ちゃ
んとした教育ができなくなるはずだからだ。

さまざまな問題があるにもかかわらず、私は教育大
学で教師を目指して勉強している学生たちとの出会い
を通じて日本教育の希望的な未来を見ることが出来
た。彼らは他の所で会った日本人よりずっと自分の人
生に肯定的だったし、まじめな人生を暮していたし、
勉強に熱心だった。何よりも、‘教えること’に対し
た熱い熱情を持っていて、彼らが導いていく日本の教育
の未来は明るいだらうと考えた。そして彼らを通し
て、失った十年前の私を取り戻すこともできた。

あと3ヶ月経ったら日本を離れて韓国に帰ること
になる。まるで井戸の中の蛙が新しい世の中に出て冒険
して、また井戸の中に帰ることのように。この新しい
世界から学んだこと、経験したことを生かして私の生
徒たちに教育らしい教育をしたいと思っている。

再び生徒たちと向き合っている私のことを想像する
だけで、まるで初めて教壇に立った日のように私の目
はきらきら、私の胸はどきどきする。

「複雑系の思考法」との共生

数学科教授 占部博信

「経済」や「教育」とかけて「何」と解く？

—「複雑系」と解く—

最近、目に余るのは、いろいろと不気味な事件が頻発したり、また、民間企業における、非正規社員の大規模解雇に見られるような就業状況の大変化の多発であります。

ちなみに、今までで最高の営業利益をあげた優良な大企業が、半年後には、1万人を越す派遣社員や契約社員の突然の解雇を発表するなんてことが起こるのです。予測ができないのは、「気象変動」だけではなさそうですね。

実際、小学校などの教育現場では、教師が、「いじめ」の問題への対処だけでなく、「モンスターペアレント」に悩まされたりしていますし、考えてみれば、保護者の人達も、「景気の先行き」や「子供の将来」のことなど、これからどうなるのか不安で一杯なのだと思います。

思い起こせば、

『天災は忘れたころにやってくる』

と言ったのは、「カオス」現象を日本で初めて考察したといえる）物理学者の寺田寅彦です。

では、（天災でもないし、人災でもないというべきかもしれないが、）前述のような予測しがたい大変化や対処の仕方に手を焼くような事象がどうしてもいろいろとおこるのでしょうか？

それは、「種」を明かせば、世の中の諸々の事象が、実は、（応用数理科学の専門用語でいうと）「**複雑系**」だからなのであります。

このことを簡単に説明したいと思います。（難解そうだが、心配ご無用！）

さて、『**「複雑系」とは何か？**』ですが、これは、構成要素の間の「相互作用」が無視できないような系（システム）のことなのであります。

こう言えば、世の中のことども一系（システム）—は、政治であれ、経済であれ、教育やスポーツなどに至るまで、ほとんどすべて「複雑系」であるということを実感してもらえるとと思います。このとき、重要なのは、

『系（システム）が、相当に単純そうに見えても、構成要素の数が（少なくとも）3以上であれば、要素間の「相互作用」によって、思いもよらない（予測できないような）複雑な状況が出現しうる』

ということなのです。

では、このような思いもよらない（予測しがたい）ことが度々起こるような現代社会をうまく生き抜くために有益な対処法はないのでしょうか。

これに関して、大いに参考になるのが、次のような本であります。

- ①西山賢一著：次代を拓く『複雑系の思考のヒント』
日本実業出版社（1999年9月）
- ②ジョン・キャスト著（中村和幸訳）：『複雑系による科学革命』
講談社（1997年5月）
- ③吉永良正著：『「複雑系」とは何か』
講談社現代新書1328（1996年12月）

なお、以下で述べることとの関連で、

- ④茂木健一郎編著：『科学のクオリア』
日経ビジネス人文庫 科学648
（2007年11月）

も挙げておきたいと思います。

「**複雑系**」のキーワード

「カオス」については、**初期値敏感性**、「フラクタル」については、**自己相似性**が重要なキーワードですが、次に、③の本に解説されている（順序は異なりますが）、「複雑系」の重要なキーワードをいくつか挙げておきます。

創発 (emergency)：これは、「複雑系」の総括的なキーワードというべきものですが、その系（システム）の局所的な相互作用によって、系全体に特異な構造や性質が（突然）出現する現象のことで、（学校などで見られる）「いじめ」という現象はそのような典型的なものでしょう。

自己組織化臨界 (self-organized-criticality)：これはネットワークや構造化が形成されている（自己組織化されている）ので安定しているように見えるのですが、その中に大きな不安定さが同居しているような状況（現象）のことで、「学級崩壊」は、「地震」などととも、これに対応する典型的なものです。

複雑適応系 (complex-adaptive-system)：生命体はいかにして生命を維持しているのだろうかというような視点にたってみたシステム（の捉え方）のことで、生態系や免疫のシステムとか地球の環境問題などがこれに該当すると思われます。

カオスの縁 (edge-of-chaos)：これは、いろいろな

事象の安定域と不安定域の境界の構造が単純でないことを表す「名称」のことで、スポーツの試合の勝敗がいかにかつ決まるかの様相などがその例。(甲乙つけがたい2チームの試合は、どちらが勝利するのか試合終了までわからない! —だから、おもしろいのかもかもしれない。—)

これらについては、③の本の中の、第3章の第2節のサンタフェ用語の基礎知識を、プロローグの記述と合わせて、ご参照下さい。

複雑系の思考法とは何か

前述したように、「複雑系」とは(多くの、あるいは、いくつかの)構成要素間の「相互作用」から思いもよらぬ事態が発生するような系(システム)のことであり、この世界は複雑系に満ち溢れている、あるいは、複雑系そのものであると言えるわけです。そこで大切なのは「複雑系の思考法」なのです。では、「複雑系の思考法」とは何なのでしょう。

①の本で、著者は、『(欧米における)「近代の思想」では、複雑に見える現象も細かく(分けて)見ていけば単純なシステムに還元される(いわゆる「要素還元主義」で十分にやれる)と考えられてきました。』とか『実は、経済モデルの背景には、「近代」という思想があるのです。』(それゆえ、経済モデルには欠陥があるのです)と述べています。(だから、経済政策もうまくはいかないのでしょうか?)

さて、「複雑系の思考法」とは、簡潔に言えば、従来の「要素還元主義」的な(狭い)科学的な思考法から脱して、複雑なものを複雑なまま、一見関係がなさそうな要素も切り捨てないで、多面的にかつ柔軟に捉えていこうとする思考法のことなのです。

①において、『複雑系はみんな生き物に似てくるのです。』とか、さらに、複雑系の社会をこれは慢性症の社会であるという表現を用いながら、『複雑系では、病気が起こるのはごく当たり前のことで、それが起こったときに、いかにうまく付き合って共存していくかということのほうがむしろ大切なのです。』という記述は、(危機管理への対処法とも関連して)注目に値すると思われます。

さらに、①の本の後半に出てくる『自由化と規制緩和で問題は解決するのか』における記述や、②の本の第2章の10の『バブル、急騰、そして破産』における「明日の株価はわかるのか」前後の記述の内容は、経済学での『「市場」の捉え方』のいいかげんさ(未熟さ)に関連しており、②の後ろのほうにある「富は公平に分配されるか」の節の記述と合わせて、とても興味深いものであります。

数学教育での実践

数学教育については、解析学の序論をはじめとして、微分方程式や偏微分方程式や、さらには、卒論ゼミでの「カオス」と「フラクタル」にも関連する実践的な演習や作業と合わせて、いろいろとやりました。苦労もありましたが、それなりのやりがいも感じられたと思います。特に、(ウォルフラムの)「一次元セルオートマトン」につきましては、「複雑系」との関連で、京都府の免許法認定講習や1回生の基礎セミナー及び3回生の総合演習での実践教材として何回も利用してきたわけですが、(脱線的な話も交えてやったからか、)それなりに好評でしたので、よき思い出になったと言えるでしょう。

結びにかえて

何かあるとすぐに、「数学というのは、何の役に立つの?」と(恨みでもあるかのごとく)言われたりするわけですが、本当のところは、そのように思われているわけではないようなのです。

実際、④の本の中にも登場されている、(既に、「博士の愛した数式」で有名な)小説家の小川洋子氏は、数学というのは、(世の中の、最後の)「神秘」だとも述べておられますが、多くの人たちにとって、数学ができれば入試や就職に有利だとか、理工系では、数学は、道具として応用はすごく利用価値があるとか、問題が解けたらとても嬉しいとか、その思いは様々でしょうが、数学というのは、難しそうだけれども、重要で、しかも、わかれば意外と面白いものであると考える人は多いと感じます。(何事でも、『面白いものは難しいのだ』と考えます。)

ところで、④の中に出てくる、中村明一氏の『日本人の身体が生んだ複雑系としての楽器(尺八)』や、小林春美氏の『人間はなぜ言葉を覚えられるか』は、ともに、「複雑系」と深く関係する内容であって興味深いし、私は、強い感銘を受けました。

実際、前者に出てくる「密息」という呼吸法、後者での「言語の習得を助ける(3つの)ルール」という節の中に出てくる『確証のない推論が、言語獲得には重要なんです。』という(小林氏の)発言などは、とても新鮮な驚きでした。(④の)それ以外の話題でも、有用な情報が得られると期待されます。(興味があれば、是非、これらも読んでみて下さい。)

最後になりましたが、(「光」も粒子と波動の二重性をもっていますし)陰陽の思想ではないですが、『ゆっくり急げ!』という教訓をもとに、((欧米の)西洋的な考え方にのみに捕らわれず、「東洋的な考え方」を大事にする)『「複雑系の思考法」の活用』を実践し続けたいと念じつつ筆を置きたいと存じます。

京都中学校の新しくなった教室を紹介します

附属京都中学校副校長 橋本 雅子

今回は、京都中学校の改修に伴う教室等をご案内させていただきます。

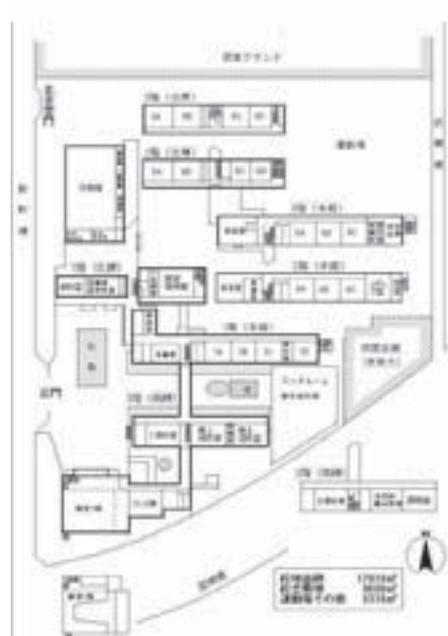
京都中学校は、昭和22年に京都師範学校男子部附属中学校として、同附属小学校内に開校しました。昭和32年に京都学芸大学（現在の中学校校舎域にあった大学）の移転に伴い、同跡地に移転独立しました。従って、中学校校舎の本館・南館は、昭和40年、北棟、体育館は、昭和41年に竣工されたものです。



その後、大きな改修工事はありませんでしたが、昨年度、体育館・北校舎・本館・南校舎の耐震補強工事に伴い、小中一貫学校の考え方にに基づき、既設校舎を改修し、学年区分ごと（4-3-2制）の教室配置を実現しました。

本校では、従来、市道を挟んで小学校（紫野団地）と中学校（小山団地）に分かれていましたが、小中一貫教育の特色の一つである小学校1年生から4年生まで（初等部4年間）と、5年生から中学1年生まで（中等部3年間）と、中学2・3年（高等部2年間）を区分する機能的なステージで学習できるように構造面で小中一貫を図ることが出来ました。これは、中等部では、小学校のシステムと中学校のシステムを融合させて小中をスムーズに移行するというねらいがあります。例えば、小学校の担任制から中学校の教科担任制へスムーズな移行を図るための措置であったり、45分授業から50分授業への移行であったり、また、体格や精神的に成長が著しい段階の配慮であったりします。その一つの試みとして、中学校の教員が小学校5・6年生の教科の授業（理科・英語・家庭・体育など）を担当してきました。これまでは、小・中の時程

が違うこと、校舎が新町通を挟んで移動しなければならないことなどから移動が大変で、時間割や時程を調整するのも困難でした。しかし、校舎改修に伴い、20年6月から小学校5年生と6年生が中学校域で学習を行うことになり、これらの問題が解消し、小中一貫のシステムが一步前進したと言えます。



これまで小さかった事務室の窓も開放的な大きな窓になりました。

小・中の教員と一緒に過ごす教員室も大きくなりました。



本校の校舎は、北校舎・本館・南校舎と分かれています。今まで特別教室と教科準備室があった北校舎に中学2・3年が入ることになり内装工事も含めて工

事をして頂きました。中学からクラス人数も小学校の時より増え、体格も大きくなることや研究発表会の参加者が多いことなどから、1クラスの教室のサイズを大きくとりました。壁も塗り替えられ明るくなった教室には、大型液晶テレビを入れ、コンピューターと接続することでデータを取り込む画面となったりメディアを使った幅広い学習が展開できるようになりました。また、教室内に個人ロッカーも設置できました。



北校舎にあった音楽室は、本館の3階に移動しました。生徒の顔が見渡せる階段式の教室になり、机と椅子も一体型で機能的なものを配置しました。合唱のパート練習などに使える小部屋もつくり、子ども達が自主的に練習に励めるようになりました。音楽室の雰囲気、明るくなって、音楽に対する意欲も高まったように思います。



同じく北校舎にあった美術室は、南校舎に技術教室と美術教室がどちらも合理的に使えるように造形第Ⅰ教室と造形第Ⅱ教室として生まれ変わりました。このことで、教室の使用頻度が均等化され同時に美術の授業が2教室で行うことが可能となりました。

体育館は、昭和41年に建築されたもので、老朽化が進み雨漏り、壁の汚れ、床の傷みなどが見られました。耐震性も目標の0.7を遙かに下回る0.2という数値であった為、今回の改修工事に至りました。この工事によって、安全性が保証されたことが、一番の効果です。また、生徒達の活動を掌握することが出来る大きな窓が設置された準備室も増築され、今まで体育館になかった更衣室やトイレも付きました。このように生徒達が効率よく学習できる体育館になったことはもちろんのこと、地域の避難場所や地域との連携を図るための行事（区民運動会・選挙開票会場等）でも活用できる体育館となりました。今後も地域の学校としての役割を果たしていきたいと思います。

今回の工事は、小中一貫教育に向けて行った工事ですが、この工事により解決した課題と新たな課題も浮かび上がりました。中学校域で5・6年生が学習するために普通教室をつくりましたが、それに伴い、特別教室棟は、今後も手を加える必要があります。また、中学生も小学校の特別教室を使う関係で移動時の安全も確保していかなければなりません。その他、給食運搬の問題や遊び場の問題などを解決していくために小中連絡通路の設置も視野に入れ、実現に向けて今後1つ1つ夢を叶えていきたいと思います。

こどもとおとなの協同活動 ～園内清掃～

附属幼稚園副園長 鍋島恵美

私たちの幼稚園では、こどもとおとなの協同活動の一つとして生活する場を美しくする「園内清掃」という2000年代に入ってから始めた取り組みがあります。今回は、そのことを紹介したいと思います。全園児140名の保護者の方に5月から（8月は休み）翌年の3月までの10ヶ月の中で必ず一回の参加協力依頼をします。毎月14名ほどの保護者の当番が決まります。そして、こどもは園内の最年長の5歳児60名が担当します。こどもの当番は、必ず自分の親が参加する月と、その他の月はおとなの人数と合うように希望者を募って決まります。

【風薫る5月 アフター チューリップ】



楽しませてくれたチューリップに感謝しつつ後始末です。球根を抜き、土を返しプランターを洗います。そして、初夏を楽しませる花が出番の時を迎える準備をします。おとなもこどもともに土にふれる良い機会になります。

【アジサイ6月 窓ガラスふき】



新聞紙をぬらして、ガラスに貼り付け乾かぬうちにその新聞を使ってゴシゴシ！
ピカピカ美しくなる不思議！見通せる透明感が梅雨時の心を明るくします。ひかるガラスを通して磨いたこどもとおとなの顔がにっこりほころびます。

【水遊び7月 プール掃除】



プールへの道を安全に快適に通えるように暑い中のがんばり！プールの側溝は、絵付きブラシを使ってゴシゴシ！水遊びの始まりです。プールは小学校にあり、横断歩道を渡って通っています。

【お月見 9月 雑草抜き】



バッタが暮らす場所は残して夏休みの間に悠々と生える草を違った種類を三つ集めて抜きました。おとなは、通う道に茂った草やゴミも掃除です。公道も美しく気持ちよくなりました。

【秋の実り10月 ギンナンの収穫】



幼稚園のシンボル母なるイチョウ！ギンナンを実らせてくれます。それを拾って皮をむいて、取り出した実を洗って干して…収穫をみんなで分かち合い食します。今年は、豊作のギンナンを家庭に販売し、そのお金をユニセフ募金に託しました。5歳児と郵便局へ持って行きました。ユニセフから感謝状が届きました。

【ぼかぼか縁側11月 ぞうきんがけ】



耐震工事の後にできた縁側は、これからの季節の遊び場に最適です。バケツに湯を張り、ぞうきん絞って両手をついて、身をかがめスースー！心地よく寝転がりたくなります。

【落ち葉のじゅうたん12月 遊んで集めて】



夜露に濡れた葉を手でそっと園庭の砂が付かぬように集めます。20リットル入りのゴミ袋20個分の落ち葉の量にこどももおとなもびっくり！

仕事が済んだ後は、ほっと一息園内で収穫できるのでティーパーティー♡おとなとこどもが共同で準備をします。春は、カモミールティーを作りました。こどももおとなも和みあえるひとときになればと思っています。

附属桃山小学校の創造性教育

附属桃山小学校副校長 藤田 加代

桃小の創造性教育は木下武次・重松鷹泰の指導を受けて昭和40年頃から始まった。「はじめに子どもありき」という精神は、今もすべての教育活動にしっかりと根付いている。



校内には、創造性教育研究所があって小谷利夫元本校副校長を所長にして教育研究の拠り所になっている。今年度の総会で

は、野原弘嗣元本校学校長本学元教授の講演がなされ、現・旧職員と共に創造性教育の本筋を確かめ合った。

創造性教育に育まれる子どもの姿

学校で学んだことをさらに伸ばしたいと、課外で自分でできるようになりたいことに取り組む子どもの姿が増えた。

一つは、地域の民俗芸能に学ぶ「六斎念仏四つ太鼓」の実践。中学生になっても伝承者から学び続けている。

もう一つは、おこと合奏団の活動。

毎年秋に開かれる御香宮神社の区民フェスティバルに出演して、地域との繋がりを深めている。



本校卒業生の松本日出彦さんは、伏見の酒造り文化を、ぜひ後輩に伝えたいと言って「よろこそ先輩」の授業を自分から申



し出て本校で展開している。先輩が語るあつい言葉は、生き方のお手本となっていくことだろう。

まさに、「自分の生活は、自分で切り拓いていく」事を教える創造性教育のたまものである。

創造性教育は三校園連携研究の柱に

桃山地区の連携教育研究は、教材や単元を繋ぐ研究ではない。幼・小・中の子も達が互いに「異年齢で学び合う姿を見取る」事をテーマに、教育プログラム作り研究をしている。

11月7日の研究発表会では、園児と小学生と一緒に秘密基地づくりをしたり、小学生と中学生と一緒に朝ごはんづくりの調理実習をしたりする授業などが行われた。



巷では、子どもの姿が見えない研究発表が多い中で、桃山地区附属学校園は、子どもの育ちを中心に据えた研究が行われていると、参観者の先生方から好評を得た。

創造性教育はエネルギー環境教育や、アーツ・イン・ディユケーションに発展して

平成17年度～19年度まで、社会経済生産性本部から認定されたエネルギー環境教育では、子ども達は、「エネルギーに着目して豊かに育つ」事を目標に今もエネルギー学習に取り組んでいる。

毎年秋に本校を会場として開かれる「小・中学生のためのエネルギー作品コンテスト」では、多数の子



も達が参加出品をしている。今年は、紙のパネを利用した作品が最優秀賞を受賞した。子ども達の創造的なアイデアが、作品

となって成就している。

音楽科で取り組んでいる「本物の芸術に学ぶアーツ・イン・エデュケーション」も、取り組んで10年になる。



今年度は、本学音楽科の饗庭知昭先生と院生が、高学年の子ども達にオペラのアリアを歌って、歌う声の出し方を教えて頂

いた。子ども達は、迫力のある生演奏を間近に体験してオペラの魅力に学んだ。

中学年では、元本学教授のピアニスト川口容子先生や、川口京子様クラリネット演奏も聴かせて頂いて、美しい本物の音を追究するきっかけになっている。



低学年では、毎年ダヤ・トミコ様と研究生にお越し頂いてインド舞踊に学ぶ学習をしている。体で音楽を感じて表現する

インド舞踊の魅力を、小さいうちに体験して学ぶことのできるかけがえのない時間になっている。

創造性教育は保護者へも

今年度から立ち上げた保護者サポーター制度。「自分のできることを自分のできる時に」を基本にして、保護者にも日常的に学校の教育活動をサポートして頂いている。「環境整備活動のお手伝いをします」という方は、このように、一人でも自分の都合のつく時間に学校に来て、日頃、子ども達が手の届かない窓ふきや隅っこの掃除をしてくださっている。



12月には、学校支援地域本部事業の申請が認められ、「ほしぞら教室」が立ち上げられた。学者のお話の後、親子で天体望遠鏡を作ったりJAXAから借りた宇宙服体験をしたりして、全校の半分ぐらいの子ども達と家族が参加して大盛況だった。



三学期の「ほしぞら教室」は、地域との連携が目標である。幸い、本校の坂東忠司校長先生と桃山高校地学科の村山保先生や糸井克成先生とは深い繋がりがあった。桃山高校には、生徒達が活動する地学部がある。毎年のクリスマスイブには、ご近所の方々を招いて星の観測会をしている由。桃山高校と連携していくと、地域との繋がりを持ちながら、星空観測を続けていくノウハウを学ぶことができる。糸井先生にも教えて頂きながら、親子で参加する星の観測会を、数回実施する予定である。

中学生は名保育士さん — 幼稚園との交流授業 —

附属桃山中学校副校長 高木 英 男

家庭科の「家族と家庭生活」子どもの成長・遊び道具の製作の単元では、幼児向け絵本づくりをおこなっています。幼児の心身の発達程度をふまえたうえで「歯をみがこう」「帰ったら手を洗おう」「友だちと仲良くしよう」といった生活習慣を身につけさせることをねらった絵本をつくります。数時間の絵本づくりの後、自作の絵本をもって幼児との交流をおこないます。今年も隣接している附属幼稚園で、絵本の読み聞かせ実習をおこないました。幼児は絵本を家族や身近な人に読んでもらうことを喜びます。絵本は言葉や知識を豊かにしてくれるだけでなく、幼児の創造力や感性を育てることに役立ちます。中学生は幼児との触れ合いやかかわりを楽しみながら、ゆっくり読むこと文章だけにこだわらず幼児とのやりとりを楽しむことに注意をはらいながら、幼児を絵本の世界に引き込んでいきました。

幼児パワーに圧倒されての実習を終えた生徒たちは、口々に「疲れたあ」と言って帰校します。しかし「はじめに、みんなが歌



をうたってくれてうれしかったです。絵本を読み始めると静かに聞いてくれたのがすごくうれしかったです。「久しぶりに小さい子どもたちと遊んで楽しかったです。絵本もしっかり読めたし、何よりも楽しく聞いてくれたのがよかったです。一緒に遊んでいると何となく心が和んできます。」「幼稚園の先生を見ていて本当に子どもに優しくてすごいと思いました。目を見て話す、幼児の言っていることを真剣に聞く、本当に優しい顔でした。」「幼児がなついてくれて時間を忘れて遊んでしまいました。幼児が隣にいただけで心も体も温くなりました。」と、すべての生徒が満足そうにさわやかな笑顔で様子を話してくれます。

人と人とのつながりが希薄になってきたといわれて何年かが過ぎました。13歳から15歳という人生で一番多感な時代を過ごす中学校で、異年齢の子どもと関わり合い学び合う場を設定できる附属桃山地区は、その学習環境を今以上に有効に活用していかなければ

なりません。現代では「お金や物質的な豊かさ」ではなく、「心の豊かさ」が幸せをはかるものさしといわれています。ほうびを



もらうことを目的とせず「幼児が喜んでくれることがうれしい」と感じられる授業をおこなえることに幼小中連携の意義を感じます。

「桃山地区の附属学校園（附属幼稚園、附属桃山小学校、附属桃山中学校）では、異年齢の園児・児童・生徒が交流を深めながら相互に学び合っています」このことが自然であり、伝統・校風・学校文化となって継承されていく、このことを願い連携研究に取り組んでいます。幼小中の教職員が協働して「異年齢の子どもが関わり合い学び合う場」の研究を進めていくことが教員文化として生まれ、「豊かな育ちを生み出す学びの環境づくり」が学校文化として根付いていくことを目指して研究を続けています。幼稚園と中学校の連携は一部の教員でおこなわれていますが、幼小中連携研究が基盤になっていることは言うまでもありません。三校園の連携は、今まで幼小、小中の異校種間とぎれがちであった学習の連続性を円滑につなぎましたが、幼小中の園児・児童・生徒の人と人とのつながりを円滑につなぐ役目も果たしています。桃山地区に来られる際には、園児・児童・生徒が楽しく相互に学び合っている姿を見ていただきたく思います。今後は新学習指導要領の理念をふまえた上での、子どもが相互に学び合う姿を追求した連携研究が求められています。さらなるご指導ご助言をいただきたくお願い申し上げます。



「一期一会」を大切に

長岡京市長岡第五小学校教諭 佐伯 知英
(障害児教育専攻 平成20年度卒業生)

京都教育大学を卒業して、早一年がたとうとしています。私は、京都教育大学に入学する前は、別の京都の短大に通っていました。当時受講していた「大学コンソーシアム」を通して、京都教育大学のある先生に出会いました。それは私にとって衝撃的な出会いであり、そこからすべてが始まったように思います。京都教育大学で教育の勉強をもっとしたい!と思い、編入学を決意しました。

京都教育大学では、短大でできなかったことにたくさん挑戦しました。小学校や特別支援学校へのボランティア、子どもとのキャンプ、また教育系のことだけでなく社会勉強として、様々なアルバイトもしました。今では、それらの思い出を自分のクラスの子どもたちに楽しく話すことができ、珍しい話に子どもたちも本当に喜んで聞いてくれます。

その中でも、子どもたちとのキャンプは思い出がた

くさんあります。そのキャンプでは、多くの活動の中身を私たち学生が考えていました。活動一つ一つに目的を持ち、それが達成できるためにはどのようにしたらいいのかなど、日々仲間と何度も何度も話をしました。活動の時間配分、内容、活動に使う道具も「子どもたちにとってはどうか」を視点に考えることは今の私の教育観につながっているように思えます。活動がすべて成功したとはいえませんが、失敗したからこそ気付くことがあり、学べたことは大きいです。

ある先生との出会いからすべてが始まり、それから多くの人々から楽しいこと、悔しいこと、うれしいこと、腹が立つことなど、そんな当たり前なことだけど、とても大切なことを学びました。

これからも子どもたちをはじめ多くの人とよい出会いをし、「一期一会」の心で、時と場と仲間を大切にしていこうと思います。

「よき出逢いを」

京都市立二条中学校教諭 桂 悠紀子
(英語科教育専攻 平成19年度卒業)

先日校外学習で生徒たちと地下鉄に乗っていた時のことです。「先生!どこ出身ですかって英語でどう聞いたらいいのー?」見るとそこには、おそらく外国からの観光客であろう、大きなスーツケースを持った夫婦がいました。“Where are you from?” “UK!” 勇気を出して声をかけたその子は、返答が返ってきて満面の笑みです。それから車内では和やかな会話が始まりました。“Do you like Kyoto?” “Yes! I like Kyoto. I like Japan!” どちらかというと勉強はあまり好きではない子供たちですが、これまでに習った表現を駆使して楽しそうにおしゃべりをしています。京都駅で夫婦にさよならを言った後、「What's your name? って聞いてけばよかったなあ。」なんてつぶやく姿を見て、私はとても幸せな気持ちになりました。

在学中、イギリスの中学校で日本語指導助手として働く機会を得ました。そこで私が一番大切にしていたことは、生徒とのよい結びつきです。日本語という外

国語を通して、子供たちによき出逢いをさせたいという現地の先生の熱い思いが、そこにはありました。日本よりさらに広い枠での、多様な社会を生き抜いている子供たちとの出逢いは、私自身の自己形成にも大きく影響を与えたと思います。

「その時の出逢いが人生を根底から変えることがある。よき出逢いを」私の好きな相田みつをさんの言葉です。出逢いは人生を決めます。京教大には、素晴らしい出会いがたくさんありました。走って日本列島を横断した先輩や、生徒と共に歩んでくれる熱い教授、お笑い界を目指す仲間まで…多種多様な人間との出会いは、私の何よりも宝です。

今、私は夢の教員生活を送っています。正直うまくいかないことも多いし、自分の力不足を感じることも多々あります。でも助けてくれる仲間がいます。英語という、人と人をつなぐことばの教師として、子供たちの豊かな出会いに寄与できるように、これからも奮闘していきたいです。

「井の中の蛙大海を知らず、 されど空の高さは知りうる・・・」

愛知県立海翔高等学校教諭 木本 昌光
(英語教育専修 平成17年度修了生)

縁もゆかりもない愛知県に就職して、早3年。悪戦苦闘の日々を送りながらも生徒と楽しい時間を過ごしている。まだまだ慣れない担任業務や分掌業務をこなす、自分の城である吹奏楽部の指導も行っている。思い起こせば、学部生時代は部活のために大学へ原付を走らせていたのかもしれない。授業も少々やる気がなく、先生方にも多分に迷惑をかけてしまった。この紙面をお借りしてお詫びをしたい。

そんな私でも、大学院に進もうと思ったのは授業中だった。夢中になっていた認知言語学を勉強したいというのもあったが、Readingの授業で3週間連続怒られた経験は大きかった。あれほど恥をかいたことは未だかつてなかった(本当にO先生に感謝!)。ある程度英語には自信があると思っていた自分の出鼻は完全に挫かれ、同時に「このまま教員になっては、生徒に二セ英語を教えてしまい失礼だ」と考えたのが契機だった。その厳しさ、そしてそんな私でも包み込んでしまう教授陣の懐の深さに私は助けられ、今日があると思う。感謝してもしきれない。

現在の勤務校は、なかなかchallengingな高校だ。"go"の過去形が"goed"になるのはまだよい方で、"cut"の過去形は"cat"になってしまう生徒もいる。そのような生徒に英語を教える事と、大学や大学院で学んだことは直結するのか・・・? 大声で"YES"と答えたい。どんな生徒にだって疑問に思うことやつまずくことはある。その疑問やつまずきに対して、大学で学んだ英語の歴史や音韻変化のことを教えると、たちまち教室が英語であふれ出すではないか! 中学校で英語の成績が悪かった生徒でも、大学で学んだ音読の仕方を伝授して一緒に読めば、「英語楽しいじゃん」と感じながら、"cut"の過去形はしっかりと"cut"になり、成績も上がる! 「この子たちに必要なものは何だろう」と考えると、自ずと勉強会や京教大に足が向いている。全て大学・大学院時代の財産だ。

英語教育は奥が深い。上を見上げれば切りがない。しかし、どこまで行けるのか、空を見上げながら考え続けようと思う。

先だって、院生がケイタイで撮った、一枚の写真を持ってきた。大阪モノレールが車内に張り出した告示ポスターの写真で、11月1日から「扉を閉めます」に「統一する」旨を伝えている。「統一する」とは、車掌によって「扉が閉まります」「扉を閉めます」どちらを言うかが、まちまちだったからである。これには実は背景がある。十年も前か、JRの宝塚駅で、ラッシュ時の混雑を解消する策として、普通「扉が閉まります」とアナウンスしていたのを、「扉を閉めます」と言うことにしたところ、みごと混雑解消に向かったという。その知恵が沿線の駅や私鉄にも広がったと聞いた。つまり自動詞表現を他動詞表現に切り替えてうまくいったというわけである。しかし、このことを東京の新聞が取り上げたが、「閉めます」とは乗客に失礼な言い方だと、あまり良い反応は示していないという。

文部省唱歌「ウミ」の歌詞、三番は戦前「ウミノオフネヲウカバシテ」であったが、戦後の教科書では「海にお船を浮かばせて」と改められた。「浮かばす」という他動詞は認められない、助動詞「せる」を使った使役表現が正しいという判断によるのであろう。日本語では、自動詞・他動詞の対応が形を変えてよく整備されている。単に一对一のペアに終わらず、例えば、「浮く」系の動詞では、自動詞・他動詞が二つずつ存在する。しかし、対応する他動詞がない場合（例「行く」）は使役の助動詞を使った表現（例「行かせる」）がその代行をする。ではいっそのこと「行かす」という他動詞を認めればいいじゃないかと言いたくなる（特殊な意味で、すでに「行かす」は用いるが）。「浮かばして」と他動詞を用いた当初の歌詞は、「浮かべて」ではリズムが整わないとみての苦肉の策であったのか。

自動詞で捉えるか、他動詞で捉えるかで、事に対する主体の認識・意識の違いが生じることがある。日本語教育では、ごく親しいと言えない人には「お茶を入れましたよ、どうぞ」でなく「お茶が入りましたよ、どうぞ」の方が丁寧さ（ポライトネス）が高いといわれる。同じ事実を「コップが割れちゃった」「コップを割っちゃった」どちらでも言えるが、後者の方が自分のした行為と認めて、責任を感じているようなニュアンスを伴っている。他動詞の表現では、動作主が存在が意識されやすいが、同じ事態を自動詞の文で表すと、動作主が背後に隠れてしまうのである。

関西のことばだろうか、「とれとれ」ということばがある。CMソングの歌詞にも「とれとれびちびち蟹

料理…」と使われている。「とれる」という動詞の語幹を重ねてできた語で、「とれたて」とも言うように、新鮮な魚や野菜などを指して使う。「とれる」は、他動詞「とる（取る）」に対する自動詞（自発動詞とも）として中世末期から見られるようだ。しかし、日常的には、他動詞で「たくさん魚をとった」「今年は米をよくとった」とか「とりたて」などと言うより、自動詞で「たくさん魚・米がとれた」「とれたて」という方が自然でなじんだ感じがする。おもしろいことに、人の動作（労働）の結果なのに、「とれる、とれた」というと、動作主としての「人」は背後に退き、何か人の力を超えたもの、「神」とか「自然」とかによって与えられた、恵んでもらった、と言うニュアンスが伴っている。こんなところに日本人の民族性が必ずと現れているのかも知れない。

ゴミの分別回収は、「燃えるゴミ・燃えないゴミ」の区別がベースにある。これは自動詞による区別だが、最近では地域によっては、他動詞による分別指示をするところがあるようだ。「燃やすゴミ・燃やさないゴミ」の区別である。なるほど、「燃える」からといって「燃や」してはいけないゴミがやたらと多くなっている。今は、うっかり庭で焚き火もできないのである。なかには「燃やせるゴミ」という区分もあるとか。また「可燃物」「不可燃物」という指示も見かけるが、日本語では「可・不可」の区別では、かえって曖昧になるのではないだろうか。

「閉める」「閉まる」の自他の区別に関して、座右の銘のように思っていることがある。若いころ私は、本学の附属高校に勤務していたが、同和教育の研修の場で、著名な歴史学者から学んだことばがある。人間はしばしば自動詞で「しまった」と思うことがあるが、そんなとき「しめた」と他動詞で捉え直してみてもどうか、と言うのである。深いことばだと思った。「しめた」と思うときこそ「しまった」と思えとも言える。自他を切り替えることで、大きく気分や思いが変わるのである。

もっとも以上の「しめた」「しまった」の「しめる」「しまる」は、実は「閉める」「閉まる」の意味の語ではない。「しめた」は「占めた」で、まんまと自分のものにしたという喜びを表し、「しまった」は「了った」で、「やってしまった、えらいことや」などと使う、取り返しのつかない思いの籠もる「了う」である。しかし私は、人生の指針として、あえて「閉める」「閉まる」の自他の対立と考えることにしている。
(2008.12.記)

地域貢献・地域支援のための データベース検索方法

本学では、地域のニーズに応えるため、教員の持つ様々なリソースをまとめた教員情報データベースを本学ホームページにて公開していますので、検索方法を周知させていただきます。

講演依頼、教育相談等お気軽に声をおかけください。また、共同研究・受託研究にもこの研究者情報をご活用ください。

検索方法は

①京都教育大学のホームページ
(<http://www.kyokyo-u.ac.jp/>) の [研究者情報] をクリックします。



②研究者情報のページで [研究者総覧] をクリックします。



③研究者総覧のページで、何も打ち込まずに [検索] ボタンを押すと、本学教員一覧表が表示されます。講演演題等お知りになりたい場合は、左端の詳細ボタンをクリックすると情報を得ることが出来ます。



連絡方法については

講演依頼、教育相談の候補者が決まりましたら、個々の教員の研究室電話番号をお教えしますので、企画広報課企画広報グループ（075-644-8125）にご連絡ください。

連携・支援にあたっての条件については

具体的条件については、教員とご相談ください。

具体的な連携・支援の活動が教員との間でまとまりましたら

必要な手続き・書類等については、「講師派遣申請書」をダウンロードしてご利用ください。ダウンロードは <http://www.kyokyo-u.ac.jp/kouhou1/koushihaken.pdf> より行ってください。

何か不明な点がありましたら企画広報課企画広報グループまでご連絡ください。

京都教育大学地域連携・広報委員会
〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1
電話 075-644-8125
Eメール kouhou@kyokyo-u.ac.jp
担当 企画広報課企画広報グループ



第 123 号の読者の皆さまへ

KYOKYO をお読みいただきありがとうございました。

より良い広報誌を作成するため、皆さんからのご意見・ご要望をお待ちしております。

広報誌のご感想や今後取り上げてほしいこと、質問したいことなど何でも結構ですので、下記までお寄せください。

〒 612-8522

京都市伏見区深草藤森町 1 番地

京都教育大学企画広報課気付「地域連携・広報委員会」

E-mail : kouhou@kyokyo-u.ac.jp

123 号編集後記

広報 123 号をお届けいたします。本号の特集は『くものを作る』って楽しいね！真似では、楽しさが味わえないね！－ 4 年間にわたる現代 GP の活動を終えるにあたって－』、『京都教育大学特別支援教育 GP 「KYO の特別支援教育トライアングルプラン」』です。平成 20 年度が最終年となる本学の知的財産 GP と特別支援教育 GP ですが、これまでの活動のまとめとして開催されたシンポジウムの様子をご報告いたします。

特集記事以外では、連合教職大学院の院生による海外研修の報告や附属学校の取り組みの様子などをご紹介します。生き生きと活動する学生・生徒・児童の姿を皆様にお伝えできる内容となっていますので、どうかお楽しみください。

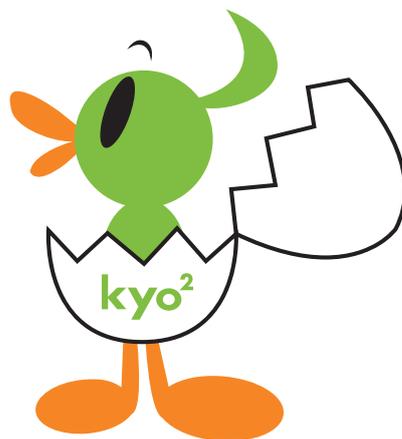
なお、今号の表紙を飾るのは附属桃山小学校の藤田恭未さんの作品です。幻想的な光の表現と小さな生き物たちの愛らしい姿をご覧ください。

地域連携・広報委員会委員長 武蔵野 實



地域連携・広報委員会

委員長	武蔵野 實				
副委員長	村田 利裕				
委員	広木 正紀	田中 里志	浅井 和行	樋口 とみ子	
	村上 忠幸	荻野 雄	榊原 禎宏	宇野 和樹	
事務担当	企画広報課				



京都教育大学広報 第123号

発行日
2009年3月25日

編集
地域連携・広報委員会

発行
京都教育大学
〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1
電話 075-644-8125
<http://www.kyokyo-u.ac.jp>